

大学院生の知られざる悩み（第一次案）

2002 年 12 月 1 日 浜田盛久

◆ 大学院生の生活実態（リズム・アルバイト・経済面）

大学院生の生活リズムは、人によっても、また、専攻分野・研究手法によっても本当に様々で、一概にはいえません。一般的に、人文社会科学系の院生は、必ずしも毎日研究室に来ているわけではなく、ゼミの日に大学に来て、あとは自宅で研究を進める人が多いようです。これは、人文社会科学系では、院生の研究スペースが必ずしも充分になく、一つの机を複数の人で共有している場合が少なからず見受けられるために、大学での腰をすえた研究活動を避ける傾向にあることも、その理由の一つと言えそうです。

一方、自然科学系の院生は、平日はほぼ毎日のように研究室に来て研究を進める場合が多いようです。その中でも、実験的研究に取り組んでいる人は、実験の都合上、休日や夜間も研究室で仕事を進めざるをえないことがあります。

（前編「研究の世界」のように、何人かの人の実例を載せた方がおもしろい。この問題を一般化するのは難しい）

院生になると、研究で時間が取られるようになり、学部学生時代のように、なかなかアルバイトがやりにくくなります。一方、大学院生の親御さんは、ちょうど定年を迎えて退職する場合が多く、高い学費をどうやって工面するかが悩みの種となります。このような高学費の時代においては、大学院生が研究生活を進めるためには、奨学金の充実が必要不可欠です。実際、「奨学金なしでは、研究生活が成り立たなかった」という声も挙がっています。諸外国では、給付制が原則の奨学金も、日本では、主要な奨学金である日本育英会奨学金は原則的に貸与性であり、しかもそのうち約半分は利子付き貸与という貧困さです。お金の心配なく大学院で研究生活を進めるためにも、奨学金制度のさらなる充実、願わくば給付制奨学金が望まれます。

◆ 指導教員との関係

皆さんは、指導教員とはどんな人間関係を築いていますか。「うまくいっている」と答えた人は、大学院生活が全体として充実しているかもしれません。指導教員は、毎日のように顔を合わせて研究を進めたり、ゼミで議論をしたりする間柄ですから、人間関係は大学院生活の中で大きなウエイトを占めています。

みなさんは、どのようにして修士論文の研究テーマを決めましたか。自分自身で決めたという人もいることと思いますが、多くの人は、大学院修士課程に入学後、指導教員と相談しながら研究テーマを決めて行くことになります。研究テーマは、その院生が学問研究の入口にふさわしく示唆に富んでいて、2年間という限られた年限内である程度のおもしろい成果が期待され、しかもその後も院生が自主的に発展させていける内容のものかどうか吟味された上で、指導教員から院生に提案される場合が多いと思います。単なる思いつきで、研究テーマが提示されるわけではないのです。大学院生が、その「与えられた」テーマに取り組みはじめる時期は、教科書講読による基礎固めや先行研究調査など、指導教員に「言われた通りに」やらざるを得ないことがあるかもしれません。しかしその中で、疑問点や、新しいテーマが見つければ、あなたには研究者としても素質があるといっているかもしれません。修士課程は、出発点は教員のアドバイスであったとしても、それを土台に「自分の考えとやり方を見いだす」発展過程です。指導教員にとっても、大学院生が自ら想像力を働かせながら研究を進め、成果をあげてくれることは望むところです。ですから、学問的な質問や議論は、面倒がらずに遠慮なくしにいきましょう。きっと歓迎されるはずです。ちょっと教科書を調べれば分かることまで何でも質問するのはどうかと思われるますが、ちょっとした成果を報告しにいったり、研究を進めていく上で行き詰まった時に気軽に相談に行ける関係を、私たち自身が意識的に作っていききたいものです。

大学院生は、学部生と違って、自分から積極的に研究を進めていくところですから、基本的に「あれをしなさい、これをしなさい」と事細かに指示されることはあまりありません。でも、教員に言われるままの作業をして、研究室の歯車になっているということはありませんか。

皆さんの中には、「私の指導教員は、放任主義だ」「何も指導してくれない」と不満に思っている人もいるかもしれません。しかし、多くの指導教員は、大学院生に研究テーマについて多少なりとも助言をしている以上、研究指導を通して院生を育てたいとは思っているのです。確かに一昔前は、「大学院生は指導教員の背を見て育つ」といった雰囲気が強くなり、大学院に特に講義があるわけでもなかったと聞いています。しかし、大学院生が増えて、院生の気質が以前とは違っている今、「昔ながらの『放任主義』では院生は育たない」、と教員層の意識も変わってきています。まだ試行錯誤という面もありますが、ある程度体系だった講義も整備されつつあります。

「指導教員と馬が合わない」という悩みは、もっと深刻です。大学院の指導教員といえども人間ですから、こういうことも当然あり得ます。そういうときに、大学院生の先輩たちは、どうしているのでしょうか。ある院生は、教員と適度の距離を保つ工夫をしたり、一人の教員に絶対的師事を仰ぐのではなく、関連分野の他の教員とも関わりを持ったり、場合によっては他の教員に実質的な指導を受けたりしている場合もあります。教員と適度の距離を保つことは、指導教員との関係が良いか悪いかに関わらず、実は、院生自身が学問

的に自立していくためには重要なことなのかもしれません。

◆ 研究モラル アカデミックハラスメント セクハラ

しかし、院生と指導教員との関係がうまくいかないことは、時として教員の側に非がある事もあります。アカデミックハラスメントとよばれるものですが、そんな研究室の実例をいくつか挙げると

例1) 教員が気に入っている学生や助手を過剰にサポートし、その他はほったらかしにしている。学生が自主的に研究グループを作って学会発表しようとした講演要旨（アブストラクト）を投げつけるなど、研究者にあるまじき態度を平気で行う。日本語が理解できない留学生に対して、自分の言うことが理解されないことに腹を立て、横の助手に向かって「死ねと言え」と言うなど、人間としての基本的な素養が欠けている。

例2) 指導教員の喜怒哀楽（気分感情）の浮き沈みに、右往左往させられることです。きのうと今日の言動の違い、AさんとBさんに対する態度の違い、社会人院生とストレート組への態度の違い、社会的地位の違いによって態度が変わるなど。さらには、院生を潰すのが目的かと思われるような対応をされる教員もいます。概ね、あきらめながら過ごすのですが、例えば JSA の会員であるような、あるいは『経済』などに寄稿しているような民主的な考え方を持つ先生たち、また民主主義を自らの論文で唱えるような、自称「民主的知識人」のような教員たちにこのような態度をとられると、その学問内容まで、疑いたくなります。

私の場合は、何とかうまくきりぬけてきたなと思いますが、中には、上記のようなことでコミュニケーションがうまく行かず、潰れていった仲間もいます。

社会人の場合、仕事を辞め退職金を授業料にして大学院に来たのに、潰れてしまったあとは、退職金もなくなり、失業手当もなく、それまでの社会人としてのキャリアも無に帰する場合があります。生活にも困り、結局学部卒以上の学歴はなく、年齢がいつているので、第二の就職先もままならず・・・といったことになります。

これも、大学、あるいは研究という業界の、競争原理のなせるわざかなとも思うのですが、大学教員の、人格、人間性など、もう少し、人を育てるという資質の向上を図れないものでしょうか。社会人院生の場合（私もそうですが）、もう後へは引けない第二の人生をかけているんです。自分の人生を潰すために大学院に進学したのではないんです。

充実した院生生活であったならば、その先、就職先がなかなか決まらなくても、人生を生き抜く力を持ち続けることはできます。先生たちとも良い研究仲間であることができるでしょう。

大学院を途中でリタイアした院生たち、どうしてそうなったのか、今どうしているのか、そういった調査ができないものか、総括できないものか。指導教員との関係がうまく行かないことが原因ということが実際にあるのか、どの程度なのでしょう。

また、特に女性への被害が大きい問題として、セクシュアル・ハラスメントが挙げられます。「院生に性的な誘いかけやメール、研究上の嫌がらせ」「立場を利用して学生と性的な関係」など、氷山の一角とはいえ、被害が最近いくつか新聞報道等で明るみになってきました。大学院での研究生生活は、指導教員との信頼関係の中で成り立っていると言っても過言ではないために、このような事態が全国の大学で見受けられるのは本当に深刻と言えます。近年、大学ごとに、セクハラ相談窓口が開設され、大学としてセクハラを一掃しようという機運が高まっています。

アカデミックハラスメントにしても、セクシュアルハラスメントにしても、背景にあるのは、指導教員が絶対的に優位な立場を利用して起こっているもので、弱い立場の院生、女性が抵抗をしたくてもできないところにその本質があります。確かに、指導教員は学問の道の先輩ではありますが、人間関係の上では、対等・平等の関係であるべきです。こういった大学の病んだ部分を一步一步根絶していくことは、院生が人格を傷つけられずに学ぶ上で必要不可欠です。もし、このような事態に直面したら、一人で悩まないで〇〇〇に相談しましょう。

◆ 迷い、将来の不安、居場所

みなさんは、大学院の研究室に居場所がありますか。先ほど述べたように、院生全員に行き渡るような机も配置されていない状況ですから、物理的に研究室に居場所がないという人もいることでしょう。それに加えて、研究の行き詰まりや、指導教員、仲間の大学院生など研究室の人間関係にうまくとけ込めない、という疎外感から、研究室から足が遠ざかっている人もいるかもしれません。不登校には至らなくても、研究室に通うのは、足が重いと感じている人も、中にはいることでしょう。

大学院は研究する場所ですから、これがうまく行かないと本当に居心地が悪くなります。皆さんは、もともとは、研究が好き、あるいはもっと専門の学問を深めてみたいという思いから大学院に入学してきたことと思います。その初心を思い出してみましょう。そして、もし、自分自身の勉強が足りない、という事であれば、何をどう勉強していけばいいか指導教員や仲間・先輩の大学院生に率直に相談してみましょう。孤独感を味わっているひともいるかもしれません。研究は基本的に一人一人が進めるものですが、時として、「自分だけ、研究がうまくいっていない」「自分だけ異端のテーマに取り組んでいる」と不安になることがあります。小さな大学の大学院では、そもそも同じ年頃の大学院生が回りにい

ない、という人もいることでしょう。こういうときは、大学の枠を越えることも含めて、同じ分野の研究をしている人同士で、自主ゼミなどのネットワークをつくって励まし合うと良いと思います。このような仲間は、研究を進めていく上で本当にかけがえのない存在となることでしょう。

でも、悩みの中には、先に述べたような、セクシュアルハラスメントやアカデミックハラスメントに象徴されるような深刻なものもあります。そのような事態に巻き込まれた場合も含めて、研究生活で心の支えになるのは、大学院での信頼できる人間関係です。これは、必ずしも同じ研究室内だけとは限りません。

大学院で学んでいると、いろいろ不安にとらわれることがあります。同年齢の人たちの中には既に社会人として活躍している人もいることに対するある種の焦燥感や、このまま大学院に残っても研究者として生計を立てていけるのだろうか、という不安がそれです。あるいは、そもそも自分は研究者に向いているのだろうか、という迷いを感じている大学院生もいるかもしれません。確かに、研究職への就職難の困難さは、今も昔も、そしてこれからしばらくもすぐに解決しそうだということにはならないかもしれません。大学院生数を大幅に増やしておきながら、院生の就職難の現実、すなわち大学院生が大学院で学んだことを、社会が評価するシステムがまだ整っていない現実、国が責任をもって改善していかなければなりません。しかし、それを受け身的に待っているだけでも、事態は何も解決されません。研究者への道を歩むには、自分自身の勉強や仲間との議論によって裏打ちされた自信が必要です。その過程には困難なこともあるかもしれませんが、若手らしく前向きな解決が、やはり大学院らしいことができます。この本が、皆さんが主体的な大学院生活、とりわけ、修士課程での生活が少しでも充実するためにお役に立てれば幸いです。

(約 5300 時)